様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １３ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2013～2014
課題番号：２５７７００６９

研究課題名（和文）正本芝居噺と素噺の比較研究

研究課題名（英文）Comparative study of shouhon shibai banashi and subanashi

研究代表者
宮　信明（Miya, Nobuaki）

早稲田大学・演劇博物館・助手

研究者番号：５０６３６０３２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,200,000円

研究成果の概要（和文）：　速記や点取り（覚書）、草双紙などの文字テクストを比較考察することで、正本芝居噺・素噺それぞれの特徴（話法や演出、様式など）を正確に把握した。また現在、正本芝居噺のほぼ唯一の継承者である林家正雀師による正本芝居噺映像記録会を、東京文化財研究所において開催。正本芝居噺と素噺を比較するための基礎資料を作成しえたことは、本研究の大きな成果である。記録会の一般への公開は、芸能を記録するという側面からも、成果を広く発信するという観点からも、非常に意義深い試みであったと言えよう。さらに、三遊亭円朝以降の正本芝居噺の系譜についてオーラル・ヒストリーを収集し、文字資料の空白を埋めた。

研究成果の概要（英文）：The stenography, dictation (making notes) and written texts such as kusazoshi of shouhon shibai banashi and subanashi were weighed to accurately understand the characteristics of each verbal entertainment. Recording of shohon shibai banashi is currently held at Independent Administrative Institution National Research Institute for Cultural Properties , Tokyo by Shojaku Hayashiya who is almost the only successor of this particular performing art. It was a big achievement in this study to have successfully formed the basic data to compare the shohon shibai banashi with subanashi. It can be said that opening the recording to the public has been a significantly meaningful attempt both from the aspect of recording performing art and in terms of disseminating the achievement widely. In addition, oral histories were collected for the genealogy of shohon shibai banashi after the times of Encho Sanyutei to fill out the blank on the written documents.

研究分野：幕末明治期の芸能・文化

キーワード：日本文学　大衆芸能　寄席芸　落語　正本芝居噺　怪談噺　素噺　講談

１．研究開始当初の背景

(1) 三遊亭円朝には、しばしば「近代落語の祖」なる称号が冠されてきた。しかし、なぜ「近代」なのだろうか。なにをもって「祖」と冠されているのだろうか。そもそも円朝（落語）研究においては、落語の「近代」が問われることも、検討されることも、定義づけられることもなかったのではないか。円朝を「近代落語の祖」と呼び習わしてきた人々は、なにをもって円朝を「近代」なる時代区分に括りつけてきたのだろうか。「近世」や「近代」といった歴史性、あるいは「江戸」や「明治」といった史的枠組みを問い直しつつ、落語を構成するさまざまな要素に注目し、円朝作品の「近代」性を見極めることこそ最終的な目標であるが、さしあたり正本芝居噺と素噺の比較研究が、その結節点となる。

(2) 正本芝居噺については、その歴史や美術を八代目林家正蔵（彦六）の所演を中心にまとめた伊東清氏の著作がすでにあるものの、正本芝居噺の紹介という趣が強く、素噺との比較考察という視点は稀薄である。また、延廣眞治氏、中込重明氏による『菊模様皿山奇談』や『粟田口霑笛竹』の紹介、諸本相互の関係と初出の確認などもすでに備わるが、文字テクストに偏重するあまり、実際に演じられた高座の分析、同時代人の証言の調査については、いささか蔑にされている。八代目正蔵やその弟子林家正雀という演者自身の手になる著作も存するが、正本芝居噺を高座にかけた際の思い出話や失敗談、過去の名人上手の逸話など、面白可笑しいエピソードにその紙面の多くが割かれており、研究と呼ぶのは憚られる。

(3) 研究代表者はこれまでも、円朝の正本芝居噺から素噺への転身を、視覚から聴覚へ、集団から個人へといった方法論的転換として捉え、速記本（素噺）には残存しなかった正本芝居噺の特徴を、点取りと呼ばれる演者自筆の覚書から復元した業績を有する。しかし、それは個々の作品分析にとどまり、正本芝居噺、素噺それぞれの特徴を総合的に把握する視線を欠いていた。また、文字テクストに傾斜しがちな文学・文化研究一般の例にもれず、実際の口演の分析を等閑視していたという印象は否めない。これらの反省点を踏まえ、今後の研究を推進する。

２．研究の目的

(1) 三遊亭円朝作『真景累ケ淵』『怪談牡丹燈籠』『菊模様皿山奇談』、二代目三遊亭円生作『怪談累草紙』等々、正本芝居噺と素噺を比較検討することによって浮かび上がる、それぞれの特徴（話法や演出、様式など）を正確に記述する。

(2) (1)での考証は、同時に正本芝居噺よりも素噺を優先重視してきた「近代」落語、あるいは落語の「近代」を問い直す作業の一端ともなる。明治期以降なぜ正本芝居噺よりも素噺が優先重視されてきたのか。落語における「近代」とは、いかなる時代であったのか。ひとつひとつの作品に即しつつ、包括的に検討する。

(3) 明治 5 年、背景を描いた書割や鳴り物、歌舞伎調の科白が醍醐味の正本芝居噺を廃し、道具や身振り、声色などを使わず、いわゆる扇一本で演じる素噺へと転じた三遊亭円朝の話芸（噺の方法や内容、演出）が、その転身に際して、いかに変容したのかを具体的に考証する。と同時に、それらの改変・変容が(2)で検討した落語の「近代」とどのように呼応しているのか、あるいはしなかったのかを考察することで、円朝作品の「近代」性を明らかにする。

本研究では以上の 3 点について、速記本を中心とした文字テクストの考察、実際に演じられた高座の分析、同時代人の証言の調査を並行して、総合的に研究することを目的とする。

３．研究の方法

(1) 速記本を中心とした文字テクストの考察

一例を挙げれば、『怪談牡丹燈籠』には、点取りと呼ばれる円朝自身の手になる覚書が残されており、円朝のそれには、主要な役はもとより、物語には直接関係してこない、科白さえも与えられていないような脇役・端役にいたるまで、衣裳や年齢などの人物像が克明に記されている。この覚書の成立、あるいはいつ頃まで加筆修正がなされていたのかという年代の正確な特定は困難だが、この覚書が『怪談牡丹燈籠』の古態、つまり正本芝居噺時代の痕跡をとどめていることは、まず間違いない。速記本を中心として、点取りや草双紙など、文字テクストを比較検討することによって浮かび上がる、正本芝居噺、素噺それぞれの特徴（話法や演出、様式など）を正確に記述する。

(2) 実際に演じられた高座の分析

現在、正本芝居噺を継承しているほぼ唯一の噺家である林家正雀師による正本芝居噺映像記録会を、東京文化財研究所において開催する。正本芝居噺、素噺双方での口演を記録することによって、両者を比較するための資料を作成できることは、本研究の大きな結果・意義となろう。また文字資料の空白を埋めるために、林家正雀師（噺家）、三代目八光亭春輔師（噺家）、田中ふゆ氏（下座・三味線）、林家彦丸氏（噺家）、古今亭志ん吉氏（噺家）、山本進氏（芸能史研究家）などの実際の上演に携わった演者や下座、後見や道具方に対する聞き取り調査を実施する。

(3) 同時代人の証言の調査

当時の新聞や雑誌、単行本などを博捜することによって、いまだ報告されていない同時代の証言を発掘する。明治期の演芸資料、とりわけ新聞記事については、倉田喜弘氏による孜々とした調査がつづけられているものの、それでもやはり遺漏はあり、また雑誌や単行本については未着手のものも少なくない。それゆえ、一次資料については継続的に調査を進めてゆく。

４．研究成果

(1) 速記本を中心とした文字テクストの考察

平成 25 年度は、三遊亭円朝作『真景累ケ淵』と、円朝以前の正本芝居噺の名残をとどめる二代三遊亭円生作『怪談累草紙』(『累草紙』の全体像を示しているとされる四代目三遊亭円生『花曇中も宵月』＜『百花園』1 号〔明治 22 年 5 月 10 日〕～21 号〔明治 23 年 3 月 5 日〕まで連載 18 回＞、二代目三遊亭円楽「月下奇談　根岸の雨宿」、八代目林家正蔵「親不知の場」など）とを比較することによって、正本芝居噺時代の『真景累ケ淵』について検討した。また、『怪談牡丹燈籠』には、点取りと呼ばれる円朝自身の手になる覚書が残されており、円朝のそれには、主要な役はもとより、物語には直接関係してこない、科白さえも与えられていないような脇役・端役にいたるまで、衣裳や年齢などの人物像が克明に記されている。『怪談牡丹燈籠』の古態をとどめるこの覚書を速記本と比較することによって、正本芝居噺として演じられていた当時の『怪談牡丹燈籠』の姿を明らかにするとともに、正本芝居噺・素噺それぞれの特徴（話法や演出、様式など)を抽出した。

平成 26 年度は、三題噺としての『鰍沢』、芝居噺としての『鰍沢』、素噺としての『鰍沢』を比較検討することによって、それぞれの台詞・演出・心理描写の差異を明らかにするとともに、円朝作と伝わる『鰍沢』が、本当は河竹黙阿弥の作であることを、成立の過程からだけでなく、噺の内容・演出の面から考察した。さらに、「花火」「後家」「峠茶屋」の三題噺である黙阿弥作『鰍沢二席目』についても、『鰍沢』との対比、及び円朝と黙阿弥の影響関係を、テクスト研究の側から検討した。また『双蝶々』については、三代目春風亭柳枝「双蝶余談」(『百花園』明治 23 年 6 月～9 月号）や「引窓与兵衛」と比較することによって、続き噺としての全体像を浮き彫りにするとともに、長い物語の中から芝居噺としての『双蝶々』がどのように切り出され、上「長吉の生い立ち」「長屋」、中「権九郎殺し」、下「雪の子別れ」というように独立した噺へと成長したのかを検討した。さらに、定吉を締め殺すところから芝居調になる（中）と、吾妻橋のくだりがそっくり芝居調になる（下）を、素噺である速記本と比較することによって、正本芝居噺と素噺それぞれの特徴（話法や演出、様式など）を明らかにした。

(2) 実際に演じられた高座の分析

現在、正本芝居噺のほぼ唯一の継承者である林家正雀師による正本芝居噺映像記録会を、東京文化財研究所の実演記録室において、計 4 回開催した。

平成 25 年度は、2013 年 12 月 12 日（木）に第 1 回を、2014 年 2 月 6 日（木）に第 2 回を開催した。第 1 回は、三遊亭円朝作『真景累ヶ淵』より「お累の婚礼」を素噺で、二代目三遊亭円生作『怪談累草紙』のうち「親不知の場」を正本芝居噺で、実演していただいた。その結果、①与右衛門が土手の金五郎の世話になっている（新吉、土手の甚蔵)、②蛇がきっかけで与右衛門とるゐが睦む（新吉とお累)、③お磯にそっくりの子供（新吉の兄、新五郎にそっくりの子供）など、『怪談累草紙』と『真景累ヶ淵』の親近性とともに、登場人物の名前や心理描写の丁寧さにおいて、素噺で演じられた四代目円生の『花曇中も宵月』よりも、八代目正蔵の演じた正本芝居噺の『怪談累草紙』「親不知の場」の方が、むしろ古態を示していることが明らかになった。また第 2 回は、『真景累ヶ淵』より「深見新五郎」を素噺で、「水門前の場」を正本芝居噺で実演していただいた。素噺と正本芝居噺を比較する機会を得たことによって、①新五郎の捕り物、②駕篭屋のくだり、③甚蔵との立ち回り等々において、台詞で運んでゆく素噺と所作で見せる芝居噺という対照がはっきりとし、正本芝居噺の見世物的な特徴が明確となった。

平成 26 年度は、2014 年 6 月 10 日（火）に第 3 回を、2015 年 2 月 6 日（金）に第 4 回を開催した。第 3 回は、三遊亭円朝作『名人長二』より「仏壇叩きから湯河原まで」を素噺で、『鰍沢』を正本芝居噺で実演していただいた。とりわけ、『鰍沢』については、素噺として演じた六代目三遊亭円生が、細かい心理描写で緊迫したドラマとして描き出しているのに対して、正本芝居噺として高座にかけた八代目正蔵のおおらかで鷹揚な演出が、芝居噺の寸法に由来することを実証した。また第 4 回は、「親子茶屋」を素噺で、『双蝶々』より「雪の子別れ」を正本芝居噺で実演していただいた。ここでも素噺として「雪の子別れ」を演じた六代目円生の所演が、起伏に富むのに対して、正本芝居噺として演じた八代目正蔵それは、淡々と筋が運ばれ、道具の入るクライマックスに向かって徐々に高まってゆく。それはそのまま、素噺と正本芝居噺の特徴の違いであることを明らかにした。

以上 4 回、実際に演じられた正本芝居噺と素噺を比較検討することによって、それぞれの特徴（話法や演出、様式など）を正確に把握するとともに、正本芝居噺よりも素噺を優先重視してきた落語の「近代」について、問い直し作業を開始した。

(3) 同時代人の証言の調査
　八代目林家正蔵や六代目三遊亭円生から口伝えに語られた三遊亭円朝以降の正本芝居噺の系譜についてのオーラル・ヒストリーを収集し、文字資料の空白を埋めた。また、『諸芸新聞』『新編都草紙』『都にしき』等の同時代資料のデータ化を完了し、その分析・調査に着手した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）
①宮　信明、二代目柳亭左龍『四谷怪談』のお面、文部科学教育通信、査読無、No.334、2014、p.1

②宮　信明、初代柳家金語楼自筆落語台本、文部科学教育通信、査読無、No.328、2013、p.1

③宮　信明、モーパッサン、有島幸子と三遊亭円朝――『名人長二』論――、立教大学日本文学、査読有、第 110 号、2013、pp.45－58

〔学会発表〕（計５件）
①宮　信明、落語の〈間〉（Le Ma dans le Rakugo）、国際シンポジウム『間（ま）と間（あいだ）』日本の文化・思想の可能性、2015 年 3 月 13 日、ストラスブール大学、アルザス・欧州日本学研究所（ストラスブール・フランス）

②宮　信明、「双蝶々」と「親子茶屋」、正本芝居噺映像記録会、2015 年 2 月 6 日、東京文化財研究所（東京）

③宮　信明、「名人長二」と「鰍沢」、正本芝居噺映像記録会、2014 年 6 月 10 日、東京文化財研究所（東京）

④宮　信明、「真景累ヶ淵　深見新五郎」と「水門前の場」、正本芝居噺映像記録会、2014 年 2 月 6 日、東京文化財研究所（東京）

⑤宮　信明、「怪談累草紙」、正本芝居噺映像記録会、2013 年 12 月 12 日、東京文化財研究所（東京）

〔図書〕（計５件）
①倉田　喜弘、延広　真治他編、岩波書店、円朝全集 第十三巻、2015、「月報」pp.3－6

②早稲田大学坪内博士記念演劇博物館編、青弓社、幻燈スライドの博物誌　プロジェクション・メディアの考古学、2015、pp.48－49、62－63、66－73、92-93

③児玉　竜一監修、羽鳥　隆英、張　宝芸、永井　美和子、宮　信明編、早稲田大学坪内博士記念演劇博物館、寄らば斬るぞ！ 新国劇と剣劇の世界、2014、pp.24－27

④星野　高編、早稲田大学坪内博士記念演劇博物館、今日もコロッケ、明日もコロッケ――“益田太郎冠者喜劇”の大正、2014、pp.66－69

⑤宮　信明、大久保　遼編、早稲田大学坪内博士記念演劇博物館演劇映像学連携研究拠点、演劇と演劇性、2013、163

〔産業財産権〕
○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
　宮　信明（MIYA, Nobuaki）
　早稲田大学・演劇博物館・助手
　研究者番号：50636032

(2)研究分担者
　　（　　）

　研究者番号：

(3)連携研究者
　　（　　）

　研究者番号：

(4)研究協力者
　飯島　満（IIJIMA, Mitsuru）
　東京文化財研究所・無形文化遺産部・部長
　研究者番号：90392547